

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

一滴との出会い

幼いころから川が好きだ。ずっと眺めたり、石投げをしたり、浅瀬に足をつけ水の冷たさを体感したりするのが好きだ。また、「加茂谷鯉まつり」というイベントに参加して、五月晴れの大空に数百の鯉が悠然と泳ぐ姿を見ながら、梶取船で遊覧するのも大好きだ。

そんな、川が大好きな僕を小学校五年生の時に祖父が「那賀川源流探検ツアー」に誘ってくれた。このイベントに参加したことがきっかけとなり、僕の中に「川を楽しむ」視点に加え「水を守る」視点が生まれたように思う。あれから五年間、僕は自分にできることを考え、行動に移している。

ツアーでは、那賀川の水の原点の一滴を自分の目で見て手で掬い、自分の口に流し込んだ。また、一滴の水が滴る様子をイメージして作られた源流モニメントの美しさにも感動した。この体験を経て、僕の中で何かが変わったように感じた。僕が毎日過ごす街を流れている一級河川「那賀川」。その流れを見るたびに、「源流の一滴一滴の雫が集まったものなんだ」と考えると何とも言えない気持ちになる。この感動が僕を新しいことに挑戦する原動力となっている。

小学校の卒業式間近の三月二日に一斉休校が決まった。三カ月間にとる休校期間は僕が新しいことにチャレンジする貴重な時間となった。まず、中学生になる直前の春休み、地域の清掃活動に参加した。軍手をはいて小さな鎌を持ち、ひたすら草抜きを頑張った。子供の参加は僕だけで、ご近所の皆さんから「偉いね。助かるよ。」と声をかけていただいた。「ステイホーム」が多かったので久しぶりに自然と向き合い、地域の幅広い年代の方々との交流ができたことに幸せを実感した。

中学生になり、以前から気になっていた近所の川に不法投棄されている家庭ゴミをどうにかしたいと思うようになった。市役所に相談の電話をしたが、「待つだけではいけない」と思い、自分で月に一度の清掃をす

徳島県 阿南市立那賀川中学校 三年 笠江 駿

ることにした。なかなか全てのゴミを拾うことはできないが、一つでも拾うことが、川を守る小さな一歩になると信じて続けている。数カ月を過ぎた頃、散歩をしている人や車で通りかかった人から「苦勞様。」と声もかかるようになった。僕がゴミ拾いをする姿が地域の人の意識を変えることに繋がればと思い、家族でお揃いの「清流を守る」のTシャツも作った。確実に少しずつだが、以前に比べ川に捨てられるゴミが減り、川の水が美しくなっていることを実感できるようになった。

昨年からは家の畑に野菜の種をまき育てている。小松菜や水菜の日々の成長に水は欠かせない。水やりをしながら、改めて水の大切さについて考えた。実際に自分が野菜を育てる経験をして、田植えの時期には自宅の田んぼで苗が育っていく様子を、これまでとは違った視点で観察するようになった。

中学生生活もあと一年。インターネット上の百科事典・ウィキペディアに阿南市の歴史や観光情報を書き込む編集イベント「ウィキペディアタウンプロジェクト」に参加した。世界中の誰もが見ることができ、責任の重さを感じるとともにやりがいも感じられた。ウィキペディアで情報を編集する学びを通して、コロナでたくさんのイベントが中止や延期となっても、世界中に水の大切さを伝えることができると気持ちが前向きになった。

今日も新規感染者数が発表されている。コロナ禍の時代を生きている人々は、否応なしに命の大切さを痛感している。そして同時に命を育む自然の重みを実感しているように感じる。そういった今だからこそ、僕は気持ちを行動に移したい。自分もコツコツと地道な活動を続けるとともに、インターネットを通じて僕自身も活動した「水を守る活動」の素晴らしさを一人でも多くの人に伝えたい。自ら発信することで活動の輪を広げていきたい。そう決意し、確かな歩みが続ける決意だ。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

琵琶湖疏水を作られた皆さんへ

京都府 龍谷大学付属平安中学校 三年 鈴木 智尋

明治二十三年、琵琶湖疏水を作られた皆さん。今日、疏水は我々京都市民にとって欠かせないものになっています。生活で使っている全ての水は、琵琶湖から疏水を通じて私達の元に届きます。また、桜や紅葉の名所として、観光スポットとなっていて、地域の人々の憩いの場にもなっています。

私に通っていた小学校は疏水のそばにありました。小学四年生の時、社会科見学で疏水のルートをとったことがあります。その時、私はいつも飲んでいる水と疏水に対する思いが変わりました。滋賀県大津市にある長等山の麓から私達の住んでいる京都の間にはいくつもの山があります。疏水を通すには、その山々を越えなければいけません。皆さんが疏水を作られてから百三十二年が経ちました。現在は、技術が発展し、山の中に水路を通すことが簡単にできるようになりました。しかし、当時は大きな機械などがありません。ほとんど人の手で工事が進められました。その工事は危険なものではなかったでしょうか。現場で働いていた方々は、立坑から山の中に入り、シャベルで水路を掘り進めていました。その時、土砂崩れなどが起こったと思います。疏水を作るために十七人の方が亡くなったと聞いています。現場で活躍された皆さん、命をかけて作ってくださった疏水は今、京都の生活の中心となっています。疏水と共にできた蹴上発電所は場所を変えて今も活動しています。皆さんの努力は令和になった今でもはつきりと見ることが出来ます。

私は、いつでも安全でおいしい水が飲めることを当たり前だと思っ
ていました。しかし、疏水のルートをたどり、疏水について深く知っ
たことで、いつでも安全でおいしい水が飲めることは決して当たり前
ではないと気付きました。皆さんへの感謝の気持ちを忘れず、大切に
していきたいです。

京都は疏水のおかげで水に困るということはありません。また、日本全体でもいつでもおいしく安全な水を手に入れることができます。しかし、世界は違います。世界では約十人に三人が安全な水を手に入れることができいません。二〇五〇年になると世界人口の四割以上が深刻な水不足に陥るとも推測されています。水不足に悩まされている地域の多くは、経済的に貧しい地域です。水を引きたくとも、水路を通すためのお金がないというのが現状です。安全な水を手に入れるのに貧乏の差は関係ないと思います。

皆さんが疏水を作るためにかかったお金はおよそ百二十万円（現在の価値で約二百億円）と伝えられています。そのお金は国や市だけでなく、当時の京都市民が出していました。当時の市民は疏水に大きな期待を寄せていたのです。疏水工事も費用が集まらなければいけないわけがありません。水不足に悩んでいる人に水を届けるには、一人一人の小さな行動が大事だと思います。水不足の地域に水路を通すためのお金をみんなが少しずつ出すのです。私達には募金という手段があります。一人一人の募金額は少なくても、日本人全員が一円ずつ入れれば、総募金額は一億円を上回ります。一億円あれば、水不足の地域に水路を通す助けになるはずです。疏水を作る気運が高まった当時の京都は首都が東京に移り、活気を失っていました。市民全員が京都を元気にしたいという思いがあったから疏水ができたと思います。

私達は、国は違っても、同じ地球人として水に困っている地域に水を届けようという気持ちを持ちたいです。そうすれば、水路を作るためのお金が集まるはず。皆さんは疏水を作り、京都を明るくしてくれました。次は私達が協力して水の問題を解決し、世界を明るくする番です。静かに流れ続ける疏水が私達にそう語りかけている気がします。

農林水産大臣賞（優秀賞）

繋ぐ水

新潟県 新潟大学附属長岡中学校 三年 齋喜 璃音

日本だからこそその風景とはなんだろう。日本は他の国に比べると、小さな国である。しかし、その中にも「日本にしかない風景」というものがあると、私は思う。例えば、勢いよくしぶきをあげて落ちる滝や水鏡となり美しさを際立たせる湖、春の訪れを告げるたくさんの桜。その中でも私は、一面に広がる田んぼは日本ならではの美しい景色だと思う。田んぼは四季の移ろいを教えてくれる身近な絶景だと思っている。

日本では様々な食材が国外から輸入される中、我々の主食であるお米はほとんどが国内で作られ、日々の暮らしを支えている。特に新潟県ではお米がたくさん穫れ、さらにおいしいことで有名だ。それはなぜなのだろうか。

お米がおいしい理由とは、土や気候、そして水だという。その「水」に焦点を当ててみる。新潟県では冬に雪がたくさん降り、そして春にはミネラル豊富なきれいな雪解け水として川を流れていく。その川の水を使って米作りをするため、栄養たっぷりですっきりとした水でお米を育てることができる。また、場所によっては湧き水があり、そのまま飲むほどきれいな水もある。このように、新潟県はとても良い水質に恵まれている。おいしいお米がとれる秘密は、透き通るほどの美しさと栄養を兼ね備えた水があるからなのではないか。

さらに、お米は食べるだけではない。お米が育つ田んぼも美しい風景の一つだ。きつと田んぼの風景といえば、夏至の頃の一面の萌葱色がなびく様子や、稲刈り前の黄金にきらめく様子を思い浮かべるだろう。では稲が大きくなる前はどうか。稲が大きくなる前の景色も美しい。透き通った水の上に、まだ足首くらいの高さの若苗色の稲が植えられている。その透き通った水に、大きな空が映る様子や、堂々とそびえ立つ大きな山が映る様子もとても美しい。水鏡が広がること

で、いつもの景色が新しい景色に見える。これもまた、美しい水があるからこそのものだ。

また、水鏡を使ったアート作品も生まれている。私はこの作品を見て、強く心を打たれた。新潟県十日町市にある「清津峡」をご存知だろうか。清津峡とは、日本三大渓谷の一つで、清津峡を挟んで切り立つ巨大な崖が、V字型の大渓谷を作っている。長年の月日をかけて生まれた大きな崖や、季節によって色を変える自然。春にはみずみずしい新緑が映え、冬には美しく雪化粧されるその景色に、心を奪われる。

その清津峡をさらに美しく際立たせるのが、「水鏡」である。そこには、大地の芸術祭の作品として「Tunnel of Light」という作品がある。その作品は、トンネルの中を歩いて進んで三箇所のポイントで清津峡を見ていく。そのトンネルの終点にメインの作品が待っている。トンネルの出口に水が張っており、そのトンネルから見える清津峡の景観を反転して映す水鏡が幻想的な景色を作り出している。

私は、水は「繋ぐ」ものだと思う。なにを「繋ぐ」のかというと、命を繋ぎ、自然と人とを繋いでいると思う。水は、私たちの一番身近にある自然だと感じる。そのまま飲んだり、料理に使ったりする。また、洗濯やお風呂など、衛生的に生活するためにも利用している。私たちの生活をつくってくれるのは水で、命を繋いでくれる。さらに、美しいと感じる多くの景色には水があるように思える。しぶきをあげる水や、揺れながら光り輝く水、白く姿を変えた雪など。水鏡に映ったなんでもないいつもの景色を見るだけでも、水が姿を変えた雪が降り出す普段と違う風景を見るだけでも、人は感動できる。そんな自然と水がつくり出す美しい風景を未来に繋いでいくためにも、私たちの命を繋いでいくためにも、自然や水を守っていかなくてはならない。

経済産業大臣賞（優秀賞）

水と育む輪の中で永遠に

宮崎県

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

三年

三浦

世来

『水』というものは私達の生活に欠かせないものであり、最も基本的なものだと私は思う。水がなければ植物は育たず、また多くの産業も大きな打撃を受けるだろう。蛇口をひねるだけで水が出て、トイレに水が流れる。そんな日々を当たり前のように過ごしている私達。

だが、水が与えてくれるものは恩恵だけにはとどまらない。度重なる水災害。そして世界的にも大きな問題となつていくアフリカの水不足問題は、私達の生活を大きく一変させるものだと私は感じている。

三月二十二日。この日は国連が定めた「世界水の日」である。水がとても大切であること、きれいで安全な水を使えるようにすることの重要性について世界中の人々と一緒に考えるための日とされている。私はこの日、アフリカに住む子供達についての記事を多く見かけた。そのどれもが今の私の生活にはありうることのないものばかりで、大きな衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えている。アフリカで手に入る水は、茶色く多くの有害物質が混ざっており、その名も「命を奪う水」と呼ばれている。事実、年に三十万人以上の人々が命を落とす悲惨な現状が存在しているようだ。そんな人々にとって唯一頼りとなるのが子供達だという。彼らは、一日の大半を水汲みに追われて過ごしており、毎日水の重さに耐えながら歩き続けている。また、多くの人が水を求め、争いが絶えないという。水が十分に手に入らないうえに、命まで奪われる可能性が高い地域での生活は、一刻一刻が想像を絶するものばかりだろう。

そんな中、私の心にある言葉が刻まれた。

「水は紛争の種だけではなく、協力のきっかけにもなりえます。」この言葉は国連事務総長であるアントニオ・グテーレス氏が唱えたものだ。これを聞いた時、私は今の世界の現状を変えようと努力している人達を思い浮かべていた。なぜなら、以前この日に関連して見たサ

イトに「アフリカの水問題を解決するには、アフリカの技術だけでは難しい。でも、他の国の力を借りると解決に格段に近づく。」そう書かれていたからだ。水をきっかけに、世界中の人々が手と手を取り合い協力していく。私は驚きと共に自分もそういう人でありたいと心の底から思うようになった。

そう考えると、今の日本は格段に恵まれていると感じる。その要因としてよく言われているのが「ダム」である。私の父の前職は、ダムが通常に運行しているか整備することだった。そのため、台風や洪水などが発生すると、どんなに遅い時間でも逐一確認しに行っていた。そんなある日、私は父に誘われ石河内ダムを見学に行った。まだ幼くダムが存在する意味も知らなかった私にとって、その場所は新たな発見の連続だった。ダムには多くの水が貯まっており、一つ一つの設備が壮大なものだった。そんな中、私の頭に特に印象に残っているものがある。それは、ダムに内設されている小丸川発電所についてだ。ここでは揚水発電というものが利用されていた。揚水発電とは一度発電に使用した水を繰り返し使用するというものだ。今でも思い返すと感心するばかりだが、これもまた私達の生活の中では知り得ることはいのだろう。

『水』のもつ可能性は、どこまでも無限大だ。常に私達に寄り添い支え、何かを繋げるきっかけとなってくれる。今ある水に感謝する、これが未来を生きていく私達に必要なことなのだ。私は思う。生活するうえで気づかない間に基になつてくれる水は、それはそれは偉大だ。水に感謝することで、これから先生きていく人達に新たな可能性を届けることができる。水と育む輪の中で沢山の人が笑顔で過ごせるように。それが永遠に続くように。

国土交通大臣賞（優秀賞）

廃油石けんづくりを通して

愛媛県 高知県宿毛市愛媛県南宇和郡愛南町篠山小中学校組合立篠山中学校 二年 木下 そら

「廃油石けんを作って篠川を守ろう。」
私たちは、篠川の水質調査を通して、篠川の美しさを守るために、行動にうつしました。

私たちの学校は、総合的な学習の時間に、篠川の水質調査を毎年行っています。上流、中流、下流の三方所で、水の温度を測ったり、バックテストをしたり、水生生物を調べたりして、篠川の水の美しさを確認しています。テストの時、私は篠川が汚れていないか少し心配になります。ここ二年間の篠川の水質調査の結果は、どこも水質階級Ⅰで、きれいな水が流れています。

そんな去年の水質調査で、サワガニを発見しました。サワガニはきれいな水にしか住めない水生生物です。その中に、一匹だけお腹に四〜五ミリメートルの子ガニを抱えたサワガニを発見しました。私は、卵からかえったばかりの貴重な瞬間だと思いました。どれくらい子ガニがいるのか数えようと思つて、ピンセットでつまんで外しました。すると、母ガニから離れた子ガニが、するすると母ガニのところに戻つてしまいました。調べてみると、実は、サワガニは卵からかえると、ある程度の大きさになるまで母ガニのお腹で育つことが分かりました。これには私たちも先生も驚きました。私たちが見つけた小さな子ガニたちが、篠川で元気に育つために、少しでも篠川の美しさを守りたいと思いました。しかし、こんなにきれいな水も環境学習会で生活排水が流れていることを知りました。その中でも油が流れると、元の美しさに戻るまで長い時間かかると言われました。

そこで私たちが考えた方法が、家庭用排水で少しでも川を汚さないように、油を石けんに変える方法です。全校で話し合い、地域の人たちに呼びかけて、家庭の使用済み油を集めました。地域の人たちが協力してくださり、たくさんのお油が集まりました。先輩は、深浦婦人会の方をお願いして、廃油石けん

の作り方を教わってきました。婦人会の方たちは、地元の海を守るために、廃油石けんづくりを続けています。作った廃油石けんを販売しているのを聞いて、私たちも文化祭で販売しようと考えました。

教わった石けん作りに、米のとぎ汁を発酵させて使うというコツがあります。ご飯を炊くときに、米を洗って、何気なくとぎ汁を流します。しかし、米のとぎ汁も汚れた水だということに気付かされました。今までどれぐらい流して、川を汚していたのだろうと考えてしまいました。篠川に流した米のとぎ汁は最終的に海に流れます。婦人会の方は、上流の私たちに「汚れた水を流すな」とか言いません。何も言わず、自分たちにできることをしています。私たちはもう少し周りを気にかけなくてはいけない、知らなくてはいけないと思いました。米のとぎ汁は発酵させると、良い菌が増え、油污れがよく落ち、消臭効果があるそうです。石けん作りにもびつたりなので、私たちが作る石けんも発酵した米のとぎ汁を入れました。目標の二百個を作り、買ってもらった人が自分でも廃油石けんが作れるように作り方の説明書も入れました。

文化祭が終わって、バザーで一つでも多く買ってもらうと呼びかけました。地域の人や来てくださった人がたくさん買ってくれました。私たちの活動に協力してくれていることがうれしかったです。一緒に篠川をきれいにしてくれる仲間だと思いました。

今回の廃油石けん作りは、海に流れる油を篠川から防ぎきっかけになりました。しかし、篠川の美しさを守るだけでは、水の美しさは守れません。川と海は繋がっています。サワガニが多く生息するこの篠川を守ることが、海を守ることになります。これからも、水質調査を続け、水を汚さない方法を一つでも知り、文化祭など多くの機会に地域の方に呼びかけていきます。

環境大臣賞（優秀賞）

『水の惑星の未来は私たちが創る』

愛知県 豊橋市立本郷中学校 三年 中村 光里

「ひかちゃん、ほら新ものだよ！」

曾祖母がとれたてのキュウリを六本、しわくちゃんに笑いながら手渡してくれたので、そのまま仏壇まで走って行ってお供えをし、手を合わせてご先祖様に報告した後、さっと水洗いしてパキッと食べる。最高にうまい。同居している曾祖母は九十二歳。耳は遠く腰は曲がっているが現役バリバリで畑仕事をしている。野菜作りの名人で何種類もの野菜を栽培してくれているので、うちで買うのはキノコともやしくらいだ。祖母と両親は水耕栽培でトマト、田んぼでは米も作っている。食べ物にはほとんど困らない。本当に有難いことだ。

「令和になってから、コロナや災害や戦争で悲しいことばかりだねえ…。」

曾祖母がテレビの前でつぶやいた。昭和初期の水道のない不便な暮らしと今、便利になった引き換えに環境破壊などが進み地球が悲鳴をあげている事を、経験から知っている重みのある言葉だった。

野菜作りにはもちろん、動植物が生きていくには、水が欠かせない。

水の惑星と言われる地球には水が豊富にある。しかし、私達が使える水の量はその中のたった0.01パーセントしかないのだ。今後世界の四十億人にも上る人が水不足に陥る可能性があるという報告がある。毎年百五十万人を超える子供達が安全な水の不足により感染症にかかっているというデータもある。安全な飲料水を得られず毎日100人以上の子供が亡くなっているという過酷な現実、水源の上流国と下流国の水の使用を巡る紛争の頻発、海洋汚染、更には気候変動による水不足や水災害も相次ぐようになった。水の惑星が抱える水問題は沢山ある。

日本も例外ではない。気候変動による水災害だけではなく、実は「隠れた水不足」であるということだ。蛇口をひねれば安全な水が出るので水不足と実感している人はほとんどいないだろう。しかし、私達の生活

の多くは海外からの輸入に頼っている。その工業製品や農作物等、それらを生産するために多くの水を使用している。つまりその生産に必要な水を他国に肩代わりしてもらっているということになるのだ。世界が水不足に陥れば、他国の水に依存していた私達の生活は甚大なダメージを受けるだろう。

曾祖母に昔の生活の様子を聞いてみた。家には水道が無く井戸の水を飲食に使い、雨水で食器を洗って、風呂の水で洗濯をしていたと聞いた。戦時中中学二年生だった時に、学徒動員で工場の寮に居た時、爆撃によって水道が使えなくなって困ったそうさ。他には台風が来る度に川が氾濫して大変だった等、水に関しての苦労話が次々と出てきた。

経験談を聞き、現在水不足で困っている国への支援と、今後予想されている世界的な水不足への対策はどうすれば良いか考えてみた。

海水淡水化技術、安全に各家庭や施設に届ける技術、使用した水をきれいに自然に戻す下水処理技術等、貴重な水を安全に循環させる技術を日本は持っている。この技術を提供し、水不足に悩む国を支援していかなければならない。

そして、私達が個人としてできることは、世界の水問題から目を背けずしっかりと見て知ること、日常生活での節水を心掛けること、できるだけ国産の製品や食品を使い自給率を上げること等である。小さな努力の積み重ねは大きな力になると私は信じている。

水の惑星の住人がその「水」の恩恵を共有出来るように、世界中の人々が一緒になって真剣に考え行動しなければならぬ。

先人たちの経験や知恵を継承しながら、世界中の人と手を取り合い、新しい未来を私達みんなで作ろう。

「幸せだね。」と言えるように。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

命ある水

岩手県 盛岡中央高等学校附属中学校 三年 澤井 佳恋

岩手県には、水の名所が多くある。龍泉洞のような観光スポットだけでなく、大慈清水、青龍水といった江戸時代から守り続けられている歴史ある場所、さらには中津川のように私自身の生活にも大きく関わっている場所まで、県内をみれば数えきれないほどだ。それと同じくらい、岩手県には全国的にも名の知れた文学者が多くいる。その中の一人として有名なのは宮沢賢治だろう。絵本や国語の教科書などで彼に出会った方も多いのではないだろうか。私自身も幼い頃から彼の童話や詩と親しみ、昨年は学校で宮沢賢治学習をしたことで、より彼の生涯や作品について深い知識を得ることができた。そんな岩手県で暮らしていると、ふと「あの先人もこの景色をみていたのだろうか」と考えることがある。例えば、滝沢市の柳沢湧口は宮沢賢治の詩集「春と修羅」の中で「あの柳沢の湧水」と詠われていることから、時代は違えど私たちのよく知る先人と同じ景色を見ている可能性も当然有り得るのだ。宮沢賢治は「銀河鉄道の夜」や「雨ニモマケズ」など沢山の名作を残しているが、「やまなし」をはじめ、水に関わる作品も数多くある。今回私が「水」というテーマと深く向き合うために参考にした作品は「青森挽歌」という詩だ。この詩は賢治の妹であるトシの死を詠ったものだが、この詩から「水」について考えたことがある。

それは「水」は私たち人間の生き方と、とても似ているということだ。詩の中で彼は、碧い寂かな湖水の面を見て「天のる璃の地面と知つて／こころわななき紐になつてながれる空の楽音」と表現している。ここには水の神秘的な様子がすべて表れているように感じた。水は山から川、海へ流れ、気体となって天に昇り、やがてまた雨として大地に降り注ぐ壮大な循環の中にある。その水たちの宿命は輪廻転生のようであり、私たちが持つ仏教的思想がそのまま形となって表れているように思える。しかし、私たちが本当に考えなければいけないのはこ

こからだと感じた。水は循環する。水は一度目に見えない状態になつても、必ず元に戻ることができる、本当にそうだろうか。確かに、自然な流れでいけばその法則が正しいものであることは間違いないだろう。だが、例外として当てはまるのは人間がその流れを壊してしまつた場合だ。例えば東北最大の河川、北上川。北上川は現在、水の汚れの程度を示す水質階級はⅠと最もきれいな階級に分類され、非常に多くの生物が生息している。一方で、つい四十年前の北上川の姿は今とは全く別の川にも思えるほど悲惨な光景であつた。その原因は松尾鉱山から流れた坑廃水。当時の人々は生活にかかせない貴重な水資源を自らの手で破壊してしまつたのだ。もちろん意図してその結果になつたのではない。しかし、ここでもう一度思い出してほしいことがある。それは、宮沢賢治の作品から感じた「水も私たちも似たような運命をたどっている」ということ。それはつまり、水と人間の命の価値は対等ということであると考へた。水の運命を変えてしまうということは水の人生そのものを狂わせてしまつていくことと同義ではないだろうか。しかも、その結果はやがて私たちに返ってくる。これらのことを踏まえると、「水」という存在がどれだけ貴重であるかがよく分かるだろう。

水の無い生活を一度でも想像したことはあるだろうか。私には到底考えられない。川も湖も海も無い地球。それは果たして地球なのだろうか。雨が降らないということは虹を見ることもない。そんな人生は楽しいのだろうか。水が生きているから私たちも生きている。水は私たちの生きがいをつくっている。かつて先人たちが見た岩手の景色を守るため、水への感謝を忘れずに生活していきたい。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

私の断水体験記

和歌山県 和歌山県立向陽中学校 二年 福田 純伶

「急いで家中の水をためて。」
と母が言った。

「わかった。」

と家族それぞれ思い思いの場所に散らばる。

ほんの数分前まで私たちは平凡な日曜日の夕方をのんびりと過ごしていた。ふいに友人達から連絡がきた。

「断水になるみたいだから、水をためておいたほうがいいよ。」

という内容だった。急いでテレビをつけると紀ノ川にかけられた水道橋が崩落した映像が映し出されていた。

私たちの住む和歌山市は真真中に紀ノ川があり、浄水場はすべて対岸にある。その水を運ぶ唯一の橋が崩落したのだ。私は正直焦った。頭が混乱し、不安が込み上げてくる。私はただそこに立っていた。その時、母の一言ではっと我にかえる。

「そうだ、今のうちに水をためなければいけないんだ。」震える心をなんとか落ち着かせながら私は蛇口をひねった。勢いよくジャアアツと水が出た。「よかった、まだ水が出る。」という安堵感。

水をどんどんためていく。手分けして、容器も探す。まずはお風呂。そしてやかん、お鍋、水筒、タライ、バケツなど。それが終われば洗濯機や食洗機を回したりしながら、おかずやごはんを大量に作って冷凍したりした。

「これから、水がなくなると何が困るんだろうか。」と想像しながら対策していると、普段から、水を使わなければ困ることだらけであるということに改めて気づいた。作業は夜遅くまで続いた。

翌日、蛇口をひねると、水はチョロチョロと少なくなっていて、ツンと薬のような匂いがして、これからは、蛇口の水が使えないことを知った。顔を洗うとき、溜めた水を少し汲んで洗った。朝ごはんは、洗い物

が出ないように紙皿にラップをかけたものにごはんを入れて割り箸で食べた。トイレはためた水で流した。対岸にある学校では蛇口をひねると水が出たので私は不思議な気持ちになった。帰宅すると、また水が使えない世界。

お風呂は沸かせないので水で洗ったら冷たくて震えた。次の日からは夕方高速に乗って祖母の家に行き、お風呂に入らせてもらい、ポリタンクで水を入れてもらうことになった。母はペットボトルの水を買いに行っても売っていなかったと話していた。断水当日に水をインターネットに注文したが、注文が殺到していたようで断水が終わるまで届くことがなかった。そんな中、友人が遠くから水を届けてくれたり、近所の小学校に給水車が来てくれたり、井戸水を自由にくましてくれるお家があったり、沢山の優しい気持ちにも感謝しながら過ごした。この水道橋崩落は、全国ニュースでもとりあげられていた。私は、毎日「早く終わらないかなあ。」と思っていた。ところがそんな苦しい生活が一週間続いた。

「今日から水が出ます。」という放送が流れて父が蛇口をひねったとき、濁った水が勢いよくとびだした。

「蛇口をひねると水が出る」そんな普通だと思っていたことがどんなに待ち遠しかったことか……。水が濁らなくなつてから、コップいっぱいに入つた水を一気に喉へ流し込んだ。その時に飲んだ水は、今までで一番おいしくてあたたかい味がした。私はほっと胸をなで下ろした。そして私が飲んだこの一杯の水が届くまでたくさんの方々が昼夜を問わず働いて努力してくれたおかげであることを改めて考えた。工事をして、橋の上に水道管を設置してくれた方々。浄水場で水をきれいにする為に働いてくれている方々。今まであたり前にあると思っていたことは、決してあたり前でなかったことに気づかされて、感謝の気持ちでいっぱいになった。この気持ちを忘れずに水を大切に使うていきたいと思った。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

見える水と見えない施設

三重県 高田中学校 二年 谷野 由依

みなさんは普段、自分が飲んでいる水のことについて意識したことはありませんか。テレビのニュースで水について考えさせられるようなことが増えてきたように感じます。アフリカのある地域が慢性的に水不足になっていたり、また、台風による川の増水で被害が出たりしているニュースを見て、水について全く意識したことがないという人はあまりいないと思います。私自身、今使っている水の有り難さを考えたことは何度もありません。

実際、蛇口から出てくる水の奥にある、見えない水道管について考えたことはあまりありませんでした。しかし以前、祖母の家の近くの水道管から水が漏れていることをたまたま知りました。その水道管は橋の横にあり、見える位置でした。祖母は私をそこまで連れて行ってくれ、私はとてももったいないと感じました。その後、修理を市役所に要請し、直してもらったそうです。

なぜ破損してしまったのか父に聞くと、老朽化だと言われました。前に橋の老朽化の記事をインターネットで読んだことがあったので、同じようなことが起きているのではないかと考え、厚生労働省の資料で調べました。資料によると、高度成長期に普及した水道の更新時期が現在来ているそうです。水道管路の法定耐用年数は四十年ですが、施設の更新が進まないために、老朽化が進行し、漏水等の事故が増加し、年間二万件を超えているそうです。さらに、水道管路の耐震化はあまり進んでおらず、大規模災害時に断水が長期化するリスクもあるそうです。私の家の周辺では、今のところ漏水という言葉はあまり言われていません。しかし、地中にある水道管はもしかすると今この瞬間も壊れてしまっているかもしれません。また、三重県は南海トラフ地震が今後起きた際に多くの被害が出るといわれている地域であり、あくまでデータが全国のものだとしても水が安定的に手に入られるまでに長い時間がか

かるだろうということが予想できます。大きな綻びができてしまう前に、根本から変える必要があります。私たちもそれに協力する必要があることを感じました。

大きな綻びの例が、去年和歌山市で起こった事故だと思っています。紀ノ川に架かる「水管橋」が崩落してしまい、多くの人々が断水による影響を受けることとなってしまいました。どんなに最新技術がはやつても、生活の基盤が一つなくなるだけでこんなに不安定になってしまうのかと衝撃を受けました。

しかしまた、私たちの生活を支えている水道の奥にも縁の下の力持ちが存在しています。浄水場やダムです。私は小学生の時、社会見学で浄水場に行きました。整然とした手順で水を安全にしていくのを見て驚いたということもありましたが、一番不思議に感じたのはもともと郊外の方だと思っていたのに、案外市街地に近く、私の世界のすぐ近くに潜んでいたということでした。教科書でいくら密接に結び付いていると説明されても納得できなかったことが分かりました。

その浄水場が水を取り入れているのは川なのです。川から家の蛇口までが淀みなく連携して初めて、水を活用することができるのです。それは逆に言えば、どこかがおかしくなると水を全く活用できないということでもあります。河川の護岸工事も浄水場の点検も、私たちに無関係だとは言えないし、無関係だから無視していいともましてや言えない問題です。目を反らさず、地域の問題が何であるかを知ることから始めたいです。

シャワーズ賞（優秀賞）

山の水にはかみさんがいる

新潟県 上越教育大学附属中学校 三年 井口 慶香

「山の水にはね、かみさんがいるんだよ。」

祖母は私にそう言った。ちょうど私が五歳の時だ。「かみさん」とは「神様」のことだ。方言というほどのものではないが、祖母の周りの人たちは、一様にこの表現を使う。何だかゾクゾクするような緊張感漂う表現だ。幼い私でさえも、畏れのような、憧憬の念とでもいうような、不思議な感情に包まれた。

山の水にはかみさんがいる。そう語る祖母の手には、小さなサワガニがそっと握られていた。愛らしい姿とは対照的に、こちらをギロリと見る様子は、喻えようのない凜々しさがある。赤黒い甲羅があんなにもキラキラと太陽光を反射させるのは、山の水を纏っていたからなのか。触れてはならぬもののような気がして、私は急いでそれを水の中に還した。サワガニは逃げるそぶりすら見せず、そして、水の冷たさをもものともせず、ただ悠然と山の水の中に佇んでいた。

働き者の祖母の手は、岩のようにごつごつとしながらも、つやつやと光っている。山菜の灰汁で黒ずんだ指先はデッサンしたようにしわの陰影を際立たせる。祖母は長年、中山間地の棚田を、祖父と一緒に守ってきた。農業へのAI導入が取り上げられ、機械化が当たり前になったとはいえ、棚田での稲作は、平地の稲作の何十倍もの苦労があるという。効率性重視の大きな機械は、細いあぜ道には厄介な問題にもなるらしい。棚田の美しさを守るため、入念な畦塗りや真夏の草刈りは欠かせない。日本の原風景という棚田だが、その景観維持がどれだけ難儀かなど、思いを馳せられる人はどれくらいいるだろう。

私が暮らす地域は、大雪にてんてこ舞いになる冬を経て、雪解けを迎え、太陽の季節に辿り着く。誰もが冬を忘れる頃、溪流は溢れんばかりの勢いを増し、棚田を潤す。一番上の田に引き入れた水はじつくりと、一番下の田まで優しく覆う。青々とした稲が風になびく棚田の姿は素敵

だ。また、刈り入れ前の黄金色に輝く稲穂もまた素晴らしい。それでもやはり、私が好きなのは、田植え前、たつぷりと水が張られた、あの静寂漂う棚田の姿だ。新緑の季節、水面に空を映した緑のダムは、やがて、街を透り大地に染み渡る水となる。

山の水にはかみさんがいる。迷信のような非科学的な言葉に、真实性を感じるのは、そこに生きてきた祖母が語る言葉だからだ。祖母は山の水の偉大さを、生活の中で実感し、自然のすぐ傍に自分の日常を置いていた。洗顔や入浴、飲水など、私の生活にも、水は大きく関わっている。融雪で大量の水を使い、プールや温泉などのレジャーにもなくてはならないものである。私の周りには、活用する水であり、便利な水である。私に見えていたのは、「生活のための水」であり、自分たちが「生きるための水」の姿である。

しかし、祖母には、私の捉えとは確実に異なる、根源的な水の姿が見えている。それは地球の拍動を支える水である。もし、これが真実だとしたら、水の変化は地球の姿を変え、水の枯渇は地球の鼓動を止めるかもしれない。

山の水は、微妙なバランスの上にあるのだと思う。川の源である山の水が枯渇すれば、大きな問題を引き起こし、下流域に住む多くの人々の生活に影響を与えるかもしれない。山の様子が変われば、きっと何か大きな変化が起こるだろう。自分の生活の中だけの、自分だけの問題にせず、目の前にある自然にしっかりと向き合うことが大切なのだと思う。

山の水には、確かに、かみさんがいる。

ある時言った祖母の言葉が、今でも私の耳から離れない。

「サワガニ、また見せてあげたいんだけど、随分といなくなっちゃってね。なんか、山の水、おかしくなってきたら。かみさん、おこつてるんだらうかねえ。」

中央審査会特別賞（優秀賞）

みんなが幸せになる洋服を

茨城県

茨城大学教育学部附属中学校

三年

金沢

青空

洋服に関することで驚いたことがある。洋服を作るために水が使用されているのだ。

例えば、コットン製のTシャツ一枚を作るために二七二〇リットルの水が、ジーンズ一本を作るために最大で一〇八五〇リットルの水が使われている。これは、洋服の色を染めるための染料を洗い流したり仕上げたりする工程や、その製品を作るための原料となっている植物などを育てるために、水を使うためである。

このように、繊維製品の生産には大量に水が使われ、その量はなんと年間で九三〇億立方メートルである。これは、オリンピックの水泳プールに換算すると、三七〇〇万杯分に値する。私はこれを知ったとき、水の量が多すぎるあまり、想像もできないくらいだった。

また、洋服に関する問題は水の大量消費だけではない。河川の水質汚染だ。衣類の染色と仕上げの工程で生じる廃水が、世界中の廃水のおよそ二〇%を占めている。この廃水の中には、窒素や殺虫剤が含まれており、その土地の生活用水を汚染していることになる。

洋服を作るために、水が使われたり、汚染されたりすることによって、人の命が奪われていると言っても過言ではない。人々の生活に使われるはずであった水が洋服の生産に使われ、生活に使える水が限られる。また、きれいで安全な水を手に入れることが困難になり、汚染された水を飲まなければならないような状況になる。

限りある水資源が大量に消費されていたり、汚染されていることはもちろん問題だ。だが、私が最も問題視する点は別のところにある。今飲む水に困窮し、健康を害したり、命を落としたりする人たちが世界中に大勢いる現状の中で、水の使い方の優先順位を改めなければならぬ点である。確かに、オシャレをしたり、新しい洋服を買ったりすることは私たちの心を豊かにし、満たしてくれる大切なものの一つである。だが、

限りある水資源の使い方を今一度考えるべきではないだろうか。私が普段着ているものが、どこかの人々の水問題をさらに悪化させているかもしれないということにとっても悲しくなった。

ショッピングモールに出かければたくさん洋服が並ぶ。テレビを見ればファッション特集が組まれている。洋服は、私たちの生活にとって当たり前であり、必要なものだ。だからこそ、一人一人が洋服と水の問題について知識を深め、考え行動していかなければならない。具体的にどんなことがあるだろうか。

例えば、購入する製品を見直すことだ。コットン製のTシャツを買う際に、オーガニックコットンを選んだり、ジーンズを買う際に、ローウオーターという手法を使ったジーンズを選んだりするだけでも、水問題に貢献することができる。オーガニックコットンを選べば従来の綿より九一%も使用する水の量を削減することができる。ローウオーターという手法のジーンズでは、使用する水の量を六一%も削減できる。

日本には、伝統的な技術に藍染めや草木染めなどがある。染料は自然に還る素材でできており、水質汚染につながることはない。このような技術に再度注目し、行動を起こすことも重要だと思う。

私たちの身につけている洋服の多くが発展途上国で生産されていることや、先述した水に困窮する人々のことを考慮すると、一刻も早く改善点を見つけるべきだ。

そのために私たちがすべきことは、正しい知識を得るために学ぶことから始まる。そこから、一人一人が行動することで、本当の意味でみんなが幸せになる洋服が世の中に広まるだろう。